

大学生のライフ・キャリア・パースペクティブと親の生き方の認知

TAZAWA, Minoru / 田澤, 実

(出版者 / Publisher)

法政大学キャリアデザイン学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学キャリアデザイン学部紀要 / 法政大学キャリアデザイン学部紀要

(巻 / Volume)

7

(開始ページ / Start Page)

143

(終了ページ / End Page)

156

(発行年 / Year)

2010-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007374>

大学生のライフ・キャリア・ パースペクティブと親の生き方の認知

法政大学キャリアデザイン学部助教 田澤 実

問題と目的

人材として有用であり、同時に、自分らしく生きる方法を兼ね備えた個人を活かせる組織のあり方が探究される中で、キャリアデザイン—自分自身の人生の経験を生かしながら、よりよい働き方、学び方、暮らし方を探求し、実現していくこと—への関心が大きくなってきた（笹川、2004）。この問題を大学生に当てはめて考えてみると、大学卒業後にどのように働きたいのか、どのような家庭役割を担いたいのか、趣味やレジャーの時間や、コミュニティでの時間をどのように過ごしたいのかと言い換えることができるであろう。

それでは、大学生にとって自分自身の人生の経験に影響をもたらしているものは何であろうか。その一つとして考えられるのが、両親の影響である。実際に、人生における重要な価値については両親から取り入れているという指摘（Ochiltree、1990）もある。

父親の就業が子どもに与える影響としては、小川・田中（1979、1980）による職業継承性の研究のように、父親の職業が息子や娘に及ぼす影響を検討したものがある。これらの研究では、息子に対しても、娘に対しても職業継承性は認められること、父親がよりよく継承希望を持つことなどが明らかになっている。母親の就業が子どもに与える影響としては、末盛（2002）による日米の研究のレビューがある。末盛（2002）は、先行研究において、「母親が働くと、子どもに悪影響が生じるのか否か」ということをめぐって展開されてきたが、母親の就業の有無は子どもに対して明確な影響をほとんど与えていないことを

指摘している。

これらの研究は、父親の現在の職業や、母親の就業の有無（ライフコース）や就業形態が子どもにどのように影響を与えていたかという観点で行われてきたが、以下の三点の問題があると思われる。

第一に、子どもの受け取り方の観点が含まれていないことである。大学生の両親の年齢を考慮すると、就業をしている時期、していない時期が一時的にある親も含まれるであろう。そのような場合、ある一時点における親の就労の有無や形態よりも、大学生にとって影響のあった時期を考慮する必要があるであろう。

第二に、扱っている生活領域が就業や家族のみに偏っていたことである。例えば、母親のライフコースによる分類は、就職、結婚、出産というライフイベントの有無という視点と、その間の就業の連続性という視点からなるため、どの時期においても仕事または家族という二つの生活領域のどちらかを選択することが求められるといえる（田澤、2005）。そのため、就業している時期とは就業を重視している時期と同義となる。しかしながら、たとえ、親が就業をしていても、子どもから見て、親が就業を重視しているように見えているとは限らない。Mitscherlich（1988）が指摘するように、勤労形態の変化は父親を家庭から引き離し、父親の姿が子どもには見えにくくなっている。そのため、父親が就業していたとしても、子どもの側から見れば、家にいない人、遊んでいる人と捉えられていることもありうるであろう。その場合は、就業を重視していたというよりも余暇を重視しているように見えている可能性もある。この点を補うには、余暇や地域社会のように他の生活領域との兼ね合いを視野に入れて検討する必要があるであろう。

第三に、先行研究の多くは、父親と子ども、または、母親と子どもというように独立して行われてきた研究が多く、父、母、子という三者の関係から行われてきた研究が少ないということである。父親の機能、母親の機能を個々に考えるのではなく、その相互関係からなる一対のものとして捉える必要があるであろう。仮に父親が仕事重視の生活をしていたとしても、母親が同じように仕事を重視していた場合と、母親が家族を重視していた場合では、子どもへの影響の仕方も異なると思われる。

以上をふまえると、以下の二点を含めた研究が必要であろう。第一に、大学生が卒業後に仕事、家族、余暇、地域社会をどのように重視したいと思うのかという視点、第二に、仕事、家族だけではなく、余暇や地域社会も含めて、父親、母親が相対的にどれを重視していたのかという視点である。このような観点を含めている研究として、田澤（2005）によるライフ・キャリア・パースペクティブの研究がある。田澤（2005）は、三隅・直井・間（1987）による労働者を対象にした、MOW（Meaning of Working Life）国際比較研究で用いられた相対的な仕事中心性の得点を援用して、大学生が就職して5年目の状況を想定した見通しに用いた。田澤（2005）は、各生活領域を個人内でどのようにバランスをつけて重視しようとしているのかという見通しをライフ・キャリア・パースペクティブと呼んだ。本研究でも、この観点を用いることにする。

本研究の目的は以下の二点である。第一に、父親、母親がどのように生きていたのかという認知によって、大学生のライフ・キャリア・パースペクティブに違いがあるのか、父、母、子という三者の関係から明らかにする。第二に、大学生にとって父親像（母親像）が印象に残った時期を明らかにする。

方 法

対象者：関東近郊の私立大学（共学、総合大学、伝統校）の大学生365名（男性138名、女性227名）であった（平均年齢19.73歳、SD=1.26、18歳から25歳）。学年の内訳は1年生194名（男性72名、女性122名）、2年生42名（男性24名、女性18名）、3年生105名（男性33名、女性72名）、4年生24名（男性9名、女性15名）。なお所属学部は、文科系（文、法、商、経済、心理、人間関係、キャリアデザイン）のみであった。ただし、以降の父親像（母親像）が印象に残った時期についての質問は108名のみであった。

調査期間：2006年7月から11月、2008年10月であった。

調査内容：①大学生のライフ・キャリア・パースペクティブ（田澤、2005）：卒業後の仕事、家族、余暇、地域社会、その他の生活領域に対する相対的な重要性を調べるために、5つの生活領域について合計が100になるように得点の配分を求めた。就職して5年目の状況を想定して答えるように教示した。「余暇」には、趣味や友人との付き合いが含まれること、「地域社会」には、地域

の自治会やボランティアが含まれることを教示した（調査用紙の詳細は Appendix 参照）。

②父親、母親の生き方の認知：大学生に対して、最もよく覚えている父親（母親）像をもとに、父親と母親がどのように生きていたと思うか、上記と同様の方式で、父親と母親の両方について得点の配分を求めた。

③父親像（母親像）が印象に残った時期：父親、母親の生き方の認知の時期：父親、母親の生き方の認知について以下のような教示でその時期を尋ねた。「先ほどあなたが最もよく覚えている父親像（母親像）をもとに回答していただきました。父親（母親）がそのような生活をしていた頃、あなたはどの段階の時期でしたか。下記の中から数字で選んでください。」なお、以下の7つの選択肢を提示した。

1. 幼稚園や保育園の頃
2. 小学校1～3年生頃
3. 小学校4～6年生ごろ
4. 中学生の頃
5. 高校生の頃
6. 現在（大学生の頃）
7. その他

結 果

①大学生のライフ・キャリア・パースペクティブ：各生活領域における配点の平均を性別ごとに算出した。結果を表1に示す。男子大学生、女子大学生ともに、仕事への配点が最も高かった。その後は、家族、余暇、地域社会、その他、の順番に高かった。

また、各生活領域において1点以上の配点を行った者は、仕事364名（99.73%）、家族362名（99.18%）、余暇364名（99.73%）、地域社会283名（77.53%）、その他70名（19.18%）であった。その他を生活領域に加えて配点した者が少なかったため、その他を記述して100とした場合とそれ以外の場合の得点の補正は行わなかった⁽¹⁾。

各生活領域への配点では、仕事、家族、余暇の配点の合計で全体の9割以上

表1 各生活領域における配点の平均など（大学生、父親、母親）

	男子大学生 n = 138		女子大学生 n = 227	
	M	(SD)	M	(SD)
大学生				
仕事	40.59	(15.69)	38.08	(15.06)
家族	28.80	(11.76)	31.11	(13.88)
余暇	21.85	(10.74)	20.97	(9.26)
地域社会	7.24	(6.04)	7.52	(5.90)
その他	1.52	(4.50)	2.32	(6.08)
父親				
仕事	49.20	(17.52)	51.69	(17.87)
家族	25.36	(12.90)	26.38	(14.37)
余暇	17.04	(12.04)	16.26	(12.44)
地域社会	6.33	(7.79)	4.79	(6.89)
その他	2.07	(7.56)	0.88	(3.86)
母親				
仕事	29.14	(18.50)	27.39	(17.84)
家族	47.17	(17.44)	49.93	(17.90)
余暇	14.28	(10.81)	14.98	(10.12)
地域社会	8.70	(8.64)	6.95	(6.98)
その他	0.70	(3.15)	0.75	(3.92)

を占めていたため、これら三つの配点を以降の分析の対象とすることにした。大学生のライフ・キャリア・パースペクティブと学年、性別との関係を見るために、大学生における仕事、家族、余暇のそれぞれの配点について学年（4）×性別（2）の分散分析を行った。その結果、学年差および性差はみられなかった。

②父親、母親の生き方の認知：各生活領域における配点の平均を性別ごとに算出した（表1）。父親については、大学生の場合と同様に、仕事への配点が最も高かった。その後は、家族、余暇、地域社会、その他、の順番に高かった。母親については、家族への配点が最も高く、その後は、仕事、余暇、地域社会、その他、の順番に高かった。

148 法政大学キャリアデザイン学部紀要第7号

また、父親の各生活領域において1点以上の配点を行った者は、仕事364名(99.73%)、家族356名(97.53%)、余暇342名(93.70%)、地域社会183名(50.14%)、その他36名(9.86%)であった。また、母親の各生活領域において1点以上の配点を行った者は、仕事325名(89.04%)、家族365名(100%)、余暇340名(93.15%)、地域社会239名(65.48%)、その他24名(6.58%)であった。大学生の場合と同様に、その他を生活領域に加えて配点した者が少なかったため、その他を記述して100とした場合とそれ以外の場合の得点の補正は行わなかった。

各生活領域への配点では、父親、母親それぞれにおいて、仕事、家族、余暇の配点の合計で全体の9割以上を占めていたため、これら三つの配点を以降の分析の対象とすることにした。父親、母親の生き方の認知と学年、性別との関係を見るために、父親、母親における仕事、家族、余暇のそれぞれの配点について学年(4)×性別(2)の分散分析を行った。その結果、学年差および性差はみられなかった。

③父親、母親の生き方の認知のタイプ分け：父親、母親における生き方をどのように認知しているのかタイプ分けをするため、父親、母親それぞれにおいて、仕事、家族、余暇の配点を投入変数(Ward法-平方ユークリッド距離)として扱い、クラスタ分析を行った。各クラスタに分類される配点の特徴、人数などを考慮しながら、抽出するクラスタを変え、探索的に分類を繰り返した。父親では2つのクラスタに分類した場合を採用した。第1クラスタには156名、第2クラスタには209名の対象者が含まれていた。 χ^2 検定を行ったところ有意な人数比率の偏りが見られた($\chi^2(1)=7.70, p<.01$)。母親では3つのクラスタに分類した場合を採用した。第1クラスタは145名、第2クラスタは122名、第3クラスタは98名の対象者が含まれていた。 χ^2 検定を行ったところ有意な人数比率の偏りが見られた($\chi^2(2)=9.08, p<.05$)。

次に、父親において得られた2つのクラスタを独立変数、仕事、家族、余暇の配点を従属変数としたt検定を行った(表2)。その結果、仕事、家族、余暇の全ての配点で、統計的に有意な差異が認められた(それぞれ $t(363)=23.94, p<.001$ $t(363)=16.77, p<.001$ $t(363)=4.35, p<.001$)。母親においては、得られた3つのクラスタを独立変数、仕事、家族、余暇の配点を従

表2 父親のクラスタにおける各生活領域の配点の平均等

	C1 : 仕事家族両立群 n = 156		<	C2 : 仕事重視群 n = 209		<i>p</i>
	<i>M</i>	(SD)		<i>M</i>	(SD)	
仕事	34.89	(9.81)	<	62.58	(12.28)	***
家族	36.81	(11.89)	>	17.92	(8.71)	***
余暇	19.87	(14.29)	>	14.08	(9.87)	***

****p* < .001

表3 母親のクラスタにおける各生活領域の配点の平均等

	C1 : 家族重視群 n = 145		C2 : 仕事重視群 n = 122		C3 : 家族余暇 エンジョイ n = 98		<i>F</i> 値	多重比較
	<i>M</i>	(SD)	<i>M</i>	(SD)	<i>M</i>	(SD)		
仕事	15.51	(11.38)	47.50	(11.87)	22.40	(10.77)	277.69***	C1 < C3 < C2
家族	65.48	(12.68)	35.29	(10.15)	41.27	(10.60)	265.27***	C2 < C3 < C1
余暇	9.92	(5.43)	10.02	(6.11)	27.65	(9.09)	242.21***	C1 · C2 < C3

****p* < .001

属変数とする1要因の分散分析を行った(表3)。その結果、仕事、家族、余暇の全ての配点で、統計的に有意な主効果を示した(それぞれ $F(2, 354) = 310.64, p < .001$ $F(2, 354) = 655.12, p < .001$ $F(2, 354) = 12.69, p < .001$)。また、有意な主効果を示したものは、TukeyのHSD法(5%水準)による多重比較を行った(表3)。

父親における第1クラスタは、家族への配点が最も高いものの、仕事への配点もほぼ同様に3割ほど占めていたため、仕事家族両立群と命名した。第2クラスタは、仕事への配点が最も高く、6割近くを占めていたため、仕事重視群と命名した。

母親における第1クラスタは、家族への配点が最も高く、6割近くを占めていたため、家族重視群と命名した。第2クラスタは、仕事への配点が最も高かったため、仕事重視群と命名した。第3クラスタはクラスタ内では家族への配点が最も高いものの、クラスタ間では相対的に余暇への配点が高いことから家族余暇エンジョイ群と命名した。

④父親、母親の生き方の認知と大学生のライフ・キャリア・パースペクティブ：父親、母親の生き方の認知によって、大学生のライフ・キャリア・パースペクティブがどのように異なるのか、父、母、子という三者の関係から検討するために、まず、父親の生き方の認知と母親の生き方の認知をペアにして、以下の6つの群に分類した。

- A：父・仕事家族両立群－母・家族重視群
- B：父・仕事家族両立群－母・仕事重視群
- C：父・仕事家族両立群－母・家族余暇エンジョイ群
- D：父・仕事重視群－母・家族重視群
- E：父・仕事重視群－母・仕事重視群
- F：父・仕事重視群－母・家族余暇エンジョイ群

次に、これらの父親、母親の生き方の認知の6群を独立変数、大学生の仕事、家族、余暇の配点それぞれを従属変数とする1要因の分散分析を男子大学生、女子大学生ごとに行った。

男子大学生では、仕事への配点、家族への配点において、主効果が認められた（それぞれ $F(5, 132) = 4.50, p < .001$ $F(5, 132) = 4.34, p < .001$ ）。その後、TukeyのHSD法（5%水準）による多重比較を行った。結果を表4に示す。父・仕事重視－母・仕事重視群においては、仕事への配点が父・仕事家族両立群－母・家族重視群、父・仕事家族両立群－母・家族余暇エンジョイ群よりも有意に高く、家族への配点が父・仕事両立－母・仕事重視群を除く他の

表4 父親、母親の生き方の認知ごとの男子大学生の仕事、家族、余暇への配点の平均等

	A 父・仕事家族両立			D 母・家族重視			F 値	多重比較
	母・家族重視	母・仕事重視	母・家族余暇 エンジョイ	母・仕事重視	母・仕事重視	母・家族余暇 エンジョイ		
	n=30	n=17	n=16	n=22	n=36	n=17		
仕事	37.23 (14.21)	39.71 (14.73)	29.69 (12.45)	43.64 (15.52)	48.47 (16.64)	37.06 (12.25)	4.95***	A・C<E
家族	32.07 (11.78)	25.71 (10.14)	33.75 (10.57)	31.09 (12.15)	22.36 (11.12)	32.12 (9.65)	4.34***	E<A・C・D・F
余暇	30.00 (21.40)	17.00 (25.00)	16.00 (26.25)	22.00 (18.59)	36.00 (21.25)	17.00 (20.82)		

カッコ内の数字はSD

*** $p < .001$

4群よりも有意に低かった。

女子大学生では、仕事への配点、家族への配点、余暇への配点において、主効果が認められた（それぞれ $F(5, 221) = 3.92, p < .01$ $F(5, 221) = 2.92, p < .05$ $F(5, 221) = 3.63, p < .01$ ）。その後、TukeyのHSD法（5%水準）による多重比較を行った。結果を表5に示す。父・仕事重視-母・仕事重視群、父・仕事家族両立-母・仕事重視群においては、父・仕事家族両立-母・家族余暇両立群、父・仕事家族両立-母・家族重視群よりも、仕事への配点が有意に高く、家族への配点が有意に低かった。

なお、男子大学生、女子大学生ともに、余暇への配点においては、主効果は認められなかった。

⑤父親像（母親像）が印象に残った時期：父親像（母親像）が印象に残った時期の度数等を表6に示す。最も多かったのは父親においても、母親においても「現在（大学生のころ）」であった。なお、幼稚園や保育園のころと回答する者はほとんどいなかった。

考 察

本研究の目的は第一に、父親、母親がどのように生きていたのかという認知によって、大学生のライフ・キャリア・パースペクティブに違いがあるのか、父、母、子という三者の関係から明らかにすること、第二に、大学生にとって父親像（母親像）が印象に残った時期を明らかにすることであった。

表5 父親、母親の生き方の認知ごとの女子大学生の仕事、家族、余暇への配点の平均等

	A 父・仕事家族両立			D 母・家族重視			F 値	多重比較
	母・家族重視 n=37	母・仕事重視 n=21	母・家族余暇 エンジョイ n=35	母・家族重視 n=56	母・仕事重視 n=48	母・家族余暇 エンジョイ n=30		
仕事	31.62 (13.18)	42.48 (17.90)	33.14 (10.99)	40.63 (15.73)	42.56 (14.10)	36.83 (15.95)	3.92**	A・C<E A<D
家族	38.51 (14.85)	29.14 (12.78)	31.00 (12.88)	30.80 (14.67)	28.13 (12.40)	28.80 (13.04)	2.92*	E・F<A
余暇	18.78 (10.44)	17.76 (9.91)	24.86 (8.79)	19.79 (7.41)	20.21 (7.72)	24.80 (11.09)		

カッコ内の数字はSD

* $p < .05$ ** $p < .01$

表6 父親像（母親像）が印象に残った時期の度数等

	父親		母親	
	度数	(%)	度数	(%)
幼稚園や保育園のころ	0	(0.00)	1	(0.91)
小学校1～3年生ごろ	6	(5.45)	2	(1.82)
小学校4～6年生ごろ	14	(12.73)	7	(6.36)
中学生のころ	7	(6.36)	8	(7.27)
高校生のころ	17	(15.45)	23	(20.91)
現在（大学生のころ）	51	(46.36)	55	(50.00)
その他	13	(11.82)	11	(10.00)
合計	108		107	

① 大学生のライフ・キャリア・パースペクティブ

全体的には、男子大学生、女子大学生ともに、大学卒業後に仕事を最も重視したいと思っていた。大学生における見通しでは、男女ともに具体的な職業をあげるものが多く、女子大学生は結婚や子どもの見通しは男子大学生よりも多いという指摘（尾崎、2001）や大学生があげる将来目標は職業が多く、女子大学生は男子大学生よりも家庭に関する目標が多いという指摘（都筑、2007）という先行研究と対比すると、職業についての見通しが男女共に多いことについては同様の結果が得られたといえよう。相違点としては、家族の配点において男子大学生と女子大学生の間に差が見られなかったことである。これは、近年の男子大学生が家族に関する目標についても見通すようになったことが考えられる。

父親は仕事を重視しており、母親は家族を重視していたと思う者が多かった。一方で、男子大学生と女子大学生の間で仕事と家族への配点に差が見られなかったということは、大学生は両親の生き方とは違った生き方が必要であると認識しているのかもしれない。ただし、これは大学生に就職して5年目を想定して回答を依頼している点、および、多くの大学生が現在の父親像、母親像を想定している点には注意が必要である。

また、男子大学生、女子大学生、父親、母親における各生活領域への配点では、大学生、父親、母親それぞれにおいて、仕事、家族、余暇の配点の合計で

全体の9割以上を占めていた。この傾向は、女子大学生を対象にした(田澤、2005)の結果と一致する。新たな知見は、男子学生でも、認知された母親の生き方、父親の生き方でも同様の傾向が見られたことといえるであろう。

②父親、母親の生き方の認知による大学生のライフ・キャリア・パースペクティブの違い

男子大学生の場合、父親も母親も仕事を重視していたと認知していると、相対的に自らも仕事を重視した生活をしたと思っていた。ただし、父親も母親も仕事を重視していたと認知している者と、父親が仕事と家族を両立していて母親が仕事を重視していたと認知をしている者との間では、男子大学生の仕事への配点に差が見られなかった。

女子大学生の場合も同様に、父親も母親も仕事を重視していたと認知していると、相対的に自らも仕事を重視した生活をしたと思っていた。また、父親が仕事と家族を両立しており、母親が家族を重視していたと認知していると、相対的には自らも家族を重視した生活をしたと思っていた。これらの結果は、父親もしくは母親どちらかの生き方の認知が子ども(大学生)に影響するのではなく、父親と母親の両者がともに影響することを示している。

副田・柏木(1980)は、幼・少年期に母親が職業を持っていたことは、女子大生の職業志向を高める効果があることを明らかにしたが、本研究は、幼・少年期に関わらず、父親と母親が仕事を重視していたと女子大学生が認知しているならば、女子大学生自身も大学卒業後に仕事を最も重視したいと捉えていた。この結果は以下のことを意味するであろう。仮に、幼・少年期の子どもがいる母親が職業を持ってない、もしくは仕事を重視できない状況に置かれていたとしても、後の生活(例えば、子どもが大学生になった頃)において、父親とともに仕事を重視する生活を送り、それが子ども(大学生)に認知されれば同様のことが期待できるということである。子どもが幼・少年期において、父親、母親がどのような生活をしてきたかという点のみならず、現在における父親と母親がどのような生活をしていると大学生が認知しているのか点も重要であることを示した点は本研究の意義と思われる。

また、父親や母親がどのような生き方をしていたかという認知と、大学生が将来、余暇を重視しようとすることには関連は認められなかった。父親や母親

154 法政大学キャリアデザイン学部紀要第7号

がどのように生きていたかということは、大学生にとって、将来働くことや、家庭を持つことなどには影響しても、趣味やレジャーの時間をどのように過ごすのかということには影響しないということであろう。

③今後の課題

本研究では、大学生がどのように父親、母親の生き方をしていたのかという認知を扱っている。これは、実際に父親や母親が回答した結果を反映したものではない。今後は父親や母親自身に回答を依頼し、結果を比較することが必要であろう。

[引用文献]

三隅二不二・直井 優・間 宏 1987 働くことの意味 有斐閣。

Mitscherlich, A. 1963 Auf dem weg zur Vaterlosen Gesellschaft : Ideen zur sozialpsychologie. R.Piper & co. (小見山実訳 1988 父親なき社会 新泉社.)

Ochiltrie, G 1990 Children in Astralian families. Longman.

小川一夫・田中宏二 1979 父親の職業が息子の職業選択に及ぼす影響に関する研究 教育心理学研究、27、272-281.

小川一夫・田中宏二 1980 親の職業が娘の職業選択に及ぼす影響に関する研究 教育心理学研究、28、328-331.

尾崎仁美 2001 大学生の将来の見通しと適応との関連 溝上慎一編 大学生の自己と生き方-大学生固有の意味世界に迫る大学生心理学 ナカニシヤ出版 Pp.167-196.

笹川孝一 2004 「個人の時代」とキャリアデザイン 笹川孝一編 生涯学習時代とキャリアデザイン 法政大学出版局 Pp.3-15.

副田素子・柏木恵子 1980 女性の職業志向性に及ぼす母親の影響、東京女子大学紀要論集、31、213-238.

末盛慶 2002 母親の就業は子どもに影響を及ぼすのか—職業経歴による差異— 家族社会学研究、13(2)、103-112.

田澤実 2005 ライフ・キャリア・パースペクティブと将来イメージの関連~女子大学生が展望する仕事・家族・余暇の重みづけ~ 進路指導研究、23(2)、19-25.

都筑学 2007 大学生の進路選択と時間的展望－縦断的調査にもとづく検討－ ナカニシヤ出版.

[注]

(1) なお、「その他」に記述を行った場合には、具体的な内容を記述するように求めたが、実際に記述回答が見られたのはごく少数であった。大学生における「その他」の具体的な内容については、「勉強」、「資格取得」というような、生涯学習に関わると考えられる記述や、「恋愛」、というような、家族としてはではないパートナーに関わると考えられる記述などが見られた。父親、母親における「その他」の具体的な内容については、ほとんど記述が見られなかった。

Appendix 大学生のライフ・キャリア・パースペクティブ

あなたの将来の姿（就職して5年目）を想像してください。その時のあなたの生活において、仕事、家族、余暇（趣味や友人との付き合い）、地域社会（地域の自治会やボランティア）、その他（ある場合は [] 内に具体的な内容を記入してください）は、それぞれどのくらい重要でしょうか。それを示すために、合計100となるように下記の空欄に配点をしてください。

仕事	()	
家族	()	
余暇	（趣味や友人との付き合い）	()
地域社会	()	
その他	()	
	[具体的に：]	
	計		100	

ABSTRACT**Cognitions Regarding Parents' Lifestyle and Life Career Perspectives of Undergraduates****Minoru TAZAWA**

The relationship between cognitions of parents' lifestyle and perspective on work, family, and leisure were investigated in undergraduates, from the perspective of the relationship between father, mother, and children. Furthermore, the time when undergraduates were most impressed by the image of the father, or the mother was identified. Participants were undergraduates (n=365). They were required to respond to a questionnaire regarding their life and career perspectives, parents' life style that was most impressive, and times when they were impressed. The results indicated the followings. (1) All participants regarded work as the most important objective after graduation. (2) All participants wanted to regard work and family as important. (3) Participants indicated that the father regarded work as important, whereas the mother regarded family as important. (4) All participants that responded that their parents regarded work as relatively important considered work as being important. (5) Female students that recognized that the father reconciled work and family and that the mother regarded family as relatively important considered the family as being important. (6) Many students were highly impressed by the present lifestyles of their parents. These results are compared with previous studies and discussed.